

聖書：マタイ 9：14～17

説教題：喜びの主なるイエス

日時：2019年2月10日（朝拝）

9章に入って当時の宗教指導者たちとイエス様との違いがだんだん意識されるようになって来ました。1～8節の記事では律法学者たちがイエス様に対して批判的な態度を取りました。9～13節ではパリサイ人たちが、取税人や罪人たちと食事をするイエス様を見て批判的態度を取りました。そして今日の14～17節ではヨハネの弟子たちがイエス様のところに来て、そのあり方に疑問を呈します。このヨハネとはバプテスマのヨハネのことで、イエス様を指し示す先駆者としての働きをした人です。その弟子の中にはイエス様に対して心穏やかでない人たちもいたであろうことが他の箇所から分かります。ヨハネの福音書3章を見ると、イエス様の人気が高まり、皆あの方の方へ行ってしまおう！と憂えるヨハネの弟子たちがいたことが記されています。ヨハネ自身は「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません」と言って、その状況を良しとしていましたが、イエス様の弟子の方が多くなって行く状況を見てライバル心を燃やすヨハネの弟子たちもいたのだらうと思います。そのヨハネの弟子のある者たちが来てイエス様に問います。「私たちとパリサイ人はたびたび断食をしているのに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか」と。旧約聖書では断食すべき日として年に一度、「贖いの日」が定められていました。その他には定めはなく、特別な時に自発的に行われていました。しかしイエス様がおられた当時、敬虔なユダヤ人は週に二度、月曜日と木曜日に断食したようです。それが敬虔なユダヤ人のしるしだと考えられていました。ヨハネの弟子たちもヨハネが説いた悔い改めとセットで定期的に断食を行っていたのでしょうか。ところがイエス様の弟子たちにはその姿が見られない。それどころか、この時もイエス様と弟子たちは食事会をしていました。もしかするとこの日はヨハネの弟子たちやその他の敬虔なユダヤ人たちにとって断食の日だったのかもしれません。この神聖な日にイエスの弟子たちは陽気に飲み食いしている。一体これはどういうことなのか。なぜ敬虔なユダヤ人のしるしである断食をイエスとその弟子は実践しないのか。そのように問うて来たわけです。

これに対するイエス様の答えが15節以降に記されています。15節：「イエスは彼らに言われた。『花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか。しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。そのときには断食をしま

す。』 この花婿と花嫁のイメージは旧約聖書の言葉を背景とするものです。たとえばイザヤ書 62 章 5 節：「若い男が若い女の夫となるように、あなたの息子たちはあなたの夫となる。花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ぶ。」そしてついに神から遣わされたメシヤのことが新約聖書で花婿にたとえられています。パプテスマのヨハネ自身、イエス様を指してこう言いました。「花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。」イエス様はこれらの言葉を背景として、ご自分を花婿にたとえておられます。花婿が来ているということは今は祝宴の時であるということです。その時にどうして断食をすべきだろうか。それはふさわしくないと言っているのです。イエス様はご自身の到来は結婚式の祝宴にも似た喜びの世界の到来を意味するとされたのです。

その一方でご自身が「取り去られる」日が来るとも言われました。これはいつのことでしょう。これはやがての十字架の出来事を指す言葉です。今、イエス様とともにいて喜びの内にある弟子たちも、やがてイエス様から引き裂かれて悲しみに落ちる日が来る。「取り去られる」という言葉に示されているように、力づくで奪い去られ、暴力的な扱いを受ける時がやって来る。イエス様はその日が来ることも見据えておられました。しかしこれはイエス様が神の国の祝福をこの世界にもたらすためには欠かせないことです。なぜ罪人であり、神にさばかれるべき者たちが、結婚式にも似た神の祝宴にあずかることができるのでしょうか。それは聖なる御子であられるイエス様が私たちの代わりに十字架にかかって、そのいのちをささげてくださいるからです。私たちに代わって、とてつもない代償を払ってくださいるからです。イエス様は私たちが受けるべき罰をご自身に代わりに担ってくださいることによって、私たちの罪を処理し、解決してくださいる。そしてすべての代価を払い切ったお方として 3 日後に復活されます。その復活によって弟子たちに喜びが戻って来ます。ヨハネの福音書 16 章 22 節：「あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」こうして二度と失われない喜びの世界に弟子たちは生かされることになるのです。

私たちはこの 15 節の御言葉から改めてイエス様がもたらしてくださったのは結婚式の祝宴にも似た喜びの世界であることを覚えさせられます。その喜びをもう少し具体的に言えば、第一に私たちの罪が赦される喜びです。9 章 1～8 節でそのことを見ました。

イエス様の十字架を通して、神に対する私たちの途方もない罪はすべて赦され、もはや神から罰されることはない。第二にその結果として神に受け入れられ、神とともに歩む喜びです。罪が赦されて、私たちは恐れることなく神に近づくことができる存在とされます。神は喜んで私たちをご自身の子として受け入れ、ご自身との交わりを通してあらゆる祝福を注いでくださいます。第三にそれは聖められて行く喜びです。私たちはただ罰されず、神に受け入れられるだけでなく、この汚れた自分が造り変えられて行くという恵みにあずかります。神のかたちに造られた人間の本来の状態に向かって、神ご自身を映し出す真の人間らしさに向かって、イエス・キリストに似た者となるという最終ゴールに向かって変えられて行くのです。そして第四に私たちは最後に天の御国に入る者とされます。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない、神の栄光が満ちあふれる天国で永遠の命を持って歩む者となる。このような喜びの世界に私たちを生かすためにイエス様は私たちのところに来てくださいました。

それゆえ、その生活様式は大きく変わるようになります。16～17節に二つのたとえがあります。一つ目は16節：「だれも、真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんな継ぎ切れは衣を引き裂き、破れがもっとひどくなるからです。」新しい布切れは、まだ水にさらしておらず、洗っていないので、古い布に継ぎはぎすると、その部分が縮んで他の部分を引っ張ってしまいます。そうしてついには引き破る結果になりかねません。つまり新しいものを古いものに継ぎはぎすることはできない。新しいものと古いものを混ぜ合わせて使うことはできないということです。もう一つのたとえは17節：「また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば皮袋は裂け、ぶどう酒が流れ出て、皮袋もだめになります。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れます。そうすれば両方とも保てます。」新しいぶどう酒は発酵が十分ではなく、ガスが出るため、弾力性を失った古い皮袋に入れておくと圧力に耐え切れず、袋を破裂させるかもしれない。だから新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。これは具体的には何を意味しているのでしょうか。これは誤解されやすい言葉だと思います。特に何か新しいことをしたいと主張する人に悪用されやすい言葉です。過去のもの、古いものは後ろに捨て去って、新しい何かを始めるために都合良く使われやすい言葉です。しかしそれがイエス様の意図ではありません。このマタイの福音書でもイエス様は旧約聖書との連続性を強調して来られました。5章17～18節：「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点

一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。」 ですからイエス様は旧約的なものを否定しておられるわけではありません。旧約聖書にあることはすべて大事です。一言一句、重要です。イエス様がここで問題にしているのは当時の人々の旧約聖書の理解に基づいて慣例化・慣習化されていた生活様式のことです。そこにイエス様の教えに基づく新しい生き方をはめ込むことはできないということです。当時の人々も聖書すなわち今日で言う旧約聖書を土台にしていました。しかし彼らの理解に基づいて当時行われていた実践は、神の御心から随分と離れたものになっていました。そのことをイエス様は山上の説教で指摘されました。イエス様はそこで律法の真意について説明されて、パリサイ人の義にまさる義の生活を送らなければならないと言われました。たとえばここで問題とされた断食について言えば、律法に定められていたのは先にも触れた通り、年に一度、贖いの日における断食だけでした。それ以外は自発的なものとして特別な時に行われました。しかしイエス様が来られた当時、あるユダヤ人たちは習慣化して断食を行っていました。習慣的に行うことは悪いことではありませんが、彼らはそれを誇っていました。ルカの福音書 18 章のパリサイ人と取税人の祈りのたとえにおけるパリサイ人も、「私は週に二度断食している！」と述べて自分を誇っていました。人々は断食の中身より、断食の回数、また断食を行うことそれ自体に意味があるかのように行っていました。そして彼らは、イエス様が山上の説教で言われたように、人々が自分のしている断食に気が付くように、わざとその日は顔をやつれさせて人々の前に出るようにしました。こうして彼らはこれが功績となるかのように、それによって救いを勝ち取れるかのように考えていました。そして自分たちと同じように生活していないイエス様とその弟子たちを見て、なぜあなたがたは私たちと同じことをしないのかと批判的な態度を取っていたわけです。こうした当時の宗教的な習慣の枠の中に、イエス様の教えとそれに基づく生活は収めることができないということです。イエス様がもたらしめている神の国に比べれば、当時の人々の宗教生活は硬直化した古い皮袋にたとえられるものでした。命がなく、生気がなく、固くなってカチコチになっている皮袋。そんな古い皮袋にうまく合わせようとして、あちこち継ぎはぎすれば何とかなるというわけではない。あるいはその古い皮袋に無理に詰め込もうとするなら、その古い皮袋は破裂してしまう。それほどイエス様がもたらしめている神の国は新しい力、また新しいエネルギーを持っているということです。それは救いの喜びから溢れて来る力です。ただ神の一方的なあわれみと恵みとによって救っていただけることを知る喜びです。取税人や罪人の一人のような私でも、その祝宴に招いていただけるという世界です。その恵みを味わった人から出て来る生活は、それを知らないでただ外面的な宗教生活をしている人のそれ

とは全く違う。動機も違うし、エネルギーも違うし、その現れ方、現わし方も変わって来るのです。

しかしだからと言って私たちは、従来のものに一切捕らわれず、自由に、自分が思う通りに、ただ喜びに導かれるままに生活して良いという反対の極端に行かないようにも注意する必要があると思います。先に見たように、イエス様は「わたしは律法を廃棄するためではなく、成就するために来た」と言われました。ですから私たちの感謝と喜びにあふれる生活は、律法を全うする生活と別であってはならないのです。イエス様の教えに従って私たちが感謝を現して行く生活は、律法が命じる生活と根本的に一つなのです。一見、私たちがイエス様の救いにあずかり、新しいぶどう酒のような活力を与えられて始める生活は自由なもの、自発的なものであって、律法が述べる生活と関係がないかのように思いやすいのですが、イエス様によればそうではありません。イエス様は律法を廃棄するためではなく、満たすために来たと言われました。ですからこの両者をつなぐイエス様の教えに私たちは良く聞いて行かなければなりません。新しい皮袋とは、イエス様の恵みにあずかった人の喜びに満ちた新しい生活様式のことですが、それは実は律法が指し示して来た世界と同一なのです。イエス様は律法と違う何かを教えられたのではなく、律法の真意を説き明かされたのです。そういう意味で新しい皮袋とは、律法が目的としていた生活様式であり、律法のメッセージに本当に良く合致する生活のことであると言えるのです。

私たちは今日の御言葉の光の下でどうでしょうか。花婿を迎えた結婚式の祝宴のような、「喜び」に包まれた生活をしているのでしょうか。私たちはなお地上にあり、天国に達したわけではないので、色々なことがあり、悲しむことがあります。それでも「喜び」が圧倒的に支配する世界に生かされています。ですからパウロは、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。」(テサロニケ人への手紙第一 5 章 16~18 節)、「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」(ピリピ人への手紙 4 章 4 節)と語ることができました。私が何か立派なことをしたからではなく、むしろそんなことができない私たちがただイエス・キリストのゆえに罪を赦され、神と交わり、天国へと導かれる祝福の中に生かされている。そのことを感謝し、益々イエス様がもたらしてくださっている喜びの世界に深く歩ませていただきたいと思います。そしてその生活は新しいいのちと喜びに特徴づけられるものですが、律法に一致し、律法を満たして行くものであることも覚えたいと思います。その道を行

くためのカギはイエス様の教えに聞き続けることです。イエス様に導かれて、私たちの心からの感謝を律法の真意に沿った生活に現わし、救いの正道を前進させていただき、やがての天の大祝宴へとつながる祝福の道を歩ませていただきたいと思います。